

' 86.9月

井深対談

母性を育てることこそ... (1)

前川 喜平 (まえかわ・きへい)

東京慈恵会医科大学教授。昭和八年東京生まれ。
昭和三十九年慈恵医大大学院修了。医学博士。
四十年から二年間、アメリカのウィスコンシン大学
(小児科)・コロンビア大学(神経科)に留学。
四十六年国立大蔵病院小児科医長となり、
五十年四月より現職。

赤ちゃんの個性

井深 私、幼児の問題をずっとやっておりまして、だんだん年齢を早くしなきゃいけないといって、お産をこの間からだいぶ問題にしかけてるんです。

幼児開発協会を始めたのはかれこれ二十年ぐらい前になるんですが、そのときは、子供の知能ということだけに重点を置いて、IQの高い子供をつくればいいんだというつもりでやったんですけど、心の問題にだんだんなってきまして、一体いつ心というのが発生してくるのだろうかということから、だんだん下がってまいりまして、今はお産からの問題……。

去年、「文化と教育懇談会」というのを総理から依頼されまして、七人の先生といろいろやっていたときに、私は、今までの学力でもって人間を評価するのをやめて、人間・人柄で評価する。総理が一言、これからの教育はこうやるんだと言えば、それで勝負が決まるんだけど、ずいぶん言ったんです。総理は賛成してくださるんですけど、文部省が、どうしても人間を評価するというのはタブーなんです。

その時に、亡くなられた田中美和太郎先生と、知育と体育と徳育というものはみんながバランスをとらなきゃいけないんだと。それでも、田中美和太郎先生はやや知育にウェートを置かれましたね。

前川 それは年齢によって違うんじゃないですか、乳児であるか幼児であるかによって。

井深 それは今ちょっと別問題にして、教育自体を考える時に。

私なりにずっと考えて、生まれて一番先にやることは体育であろうと。しっかりした体をつくらないと何にもできないから、生まれてすぐの赤ちゃんの体育というところまで踏み込まなきゃいけないんじゃないかしらと。

前川 人にやらされて体を動かすことが体育というのは困るんですよ。体を動かすことと定義していただくのでしたら、その説はいいです。と申しますのは、赤ちゃん体操ってご存知ですよ。あれは子供が母親と一緒に体操する、それはいいんですよ。ある程度いきまして、次は幼児体操というのを考えた方がいいです。ところが、乳児以後の三歳までの子供たちに、体育とか訓練ということで体操をさせることは可能かどうかという問題があります。

呼び名は一応「幼児体操」ですけど、その意味がちょっと違うんですね。親と一緒に遊んでいる状態で体を動かすのを赤ちゃん体操、幼稚園に行くのはうんと早くて三歳、四歳になったら、体操教室とかいうことで体を動かすことはできる。子供を自由に活発になりますし、悪いことではないと思います。

ただ、僕ら見てまして、そういうふうにはできるお母さんとできないお母さんとありましてね。そこをどこで区別するかということと、もう一つは、赤ちゃんといってもすべて均一ではない。例えば、はいはいの好きな子、座るのが好きな子、立つのが好きな子、身軽な子、幾つかあります。動くのが好きな子には大いにやっていただく、座るのが好きな子には座らせておけばいい、それを平行しておやりになるんだったらいいと思うんです。

井深 体育に対しては全然ノータッチだったんです、いままで。これから考えていこうというのは、三歳なんてことじゃなしに、生まれてすぐの赤ちゃんをどうするか。体育といってしまくと大げさになっちゃいますから、例えば真っ裸で動けるままにするといったようなこと、だんだんやってみようと思うんです。

ただ、間違ったことをしては大変なので、生まれてすぐの赤ちゃんに対して、一体どんなことはしてもいいのか、どんなことをしちゃいけないのかというコンサルタントに、これから先生になっていただきたい。

ロシアのニキーチンという人は、子供が生まれたときから裸にさせておいて、それも特別の家でなく、普通の家らしいんですけど、そこを体育場みたいにして、七人の子供を育て、だんだん経験を経て、今までの考え方ではいけないというのに気づいて、やり方を変えていったユニークな子育ての話なんですけど、その本の中に原子歩行というのが……。原子歩行とっていいんですか？

前川 原子歩行、自動歩行、足踏み歩行、三つくらい呼び名があります。日本の場合は親の納得が大事ですね。

井深 お母さんに革命を起こしてもらおうということは、絶対必要条件だと思うんですね。

前川 健康的に許せる範囲、赤ちゃんのリズムを崩さない範囲、それならいいですね。子供の注意点というのは、赤ちゃんは体温が上がりやすくてさめやすい、熱の発散が強くてコントロールが悪いですから、うんと温かい部屋でやる。それから長時間はだめですね。ですから、肌をさすとか、姿勢を変えてやるとか、そのぐらいのことから始められたらいいと思う。要するに、母子相互作用の応用みたいなことですね。

はいはいのタイプ

井深 さっきのニキーチンさんのやり方で、六人の子供を原始歩行させたら、五、六ヶ月で歩き出して、知能指数が六人ともものすごく高いという報告が出ているんです。それは話としておいておきまして、私、いろんな方と話して、無理に歩かせたんじゃないしに五、六ヶ月で歩き出した子供というのは、頭がだいぶよさそうなんですよね。

前川 生まれた時が小さくて、早く歩く子がいるんですよ。そのときはいいけれど早く歩いて利口になったという子はあまりいないですね。

井深 無理に歩かせたのではないですよ、私の聞いたのでは。自然に歩き出した。

はいはいということが、条件を満たすのに非常に重要な要素ではありませんか。特に言語機能に対しては。

ドーマンさんと私、仲いいんですね。彼のやっていることに100%賛成しているわけではないんですけど、彼が、パタニング(はいはい)というのを基調に置いていることは正しいと思います。

前川 運動機能に関してはいいですね。

井深 それこそ体育的なこととして、パタニングというものがやられなきゃいけない。そうすると、パタニングの経過を知り得ないで歩き出した子供というのは、言語能力に障害があるということも聞いたことがあるんですね。

前川 それは私よく存じませんが、パタニングの問題で、ホルツという人が、手を加えない自然な形で観察した、歩行前の移動の仕方のデータがあるんです。高ばい（ひざをついてはう）、ローラー（寝返って移動する）、クローリング（手足を交互に出す）と、いくつかパターンがある。

それ以外に、ひじばい、それから座ってるままで、はわないで立ってしまうのがいる。赤ちゃんがこのコースを全部通って発達するわけではない、ある子が高ばいが好きで、ある場合は寝返りのほうを主にして、あっという間に立ってしまう。

井深 座っていきって移動しているタイプは遅いわけですね、ちょっと。

前川 ええ、早い子が十八ヶ月、遅いときは二歳二ヶ月。座ってすぐ立つ子は、はいはいがありませんから、すごく歩くのが早いんですね。

井深 動けるから不便を感じないわけですね。

前川 と思います。一番歩くのが遅いのがシャブル、座ったまま腰をずって移動する。これは明らかに家系が三分の一ぐらいです。日本でも、僕が調べたところだと、きょうだいや親がそのタイプ……。

井深 親は何も手伝わないですね。

前川 要するに、うちのは座るのが好きだから座らせておけ、うちのははうのが嫌いだから立たせておけというような感じでやったときのことです。ですから、はうのが好きな子、嫌いな子、座ったままずるのが好きな子と、幾つかパターンがあって、それが自然の場合は歩行の開始にもある程度比例している。こういう細かいことは教科書に書いてません。普通は、お座りして、はって、つかまり立ちしてということ。

はうというのは、一体どういう意味があるのかということだと思っんです。私、恐らく人間は生まれつき立ってるんじゃないんだと思っんです。ある時期にはサルに近い状態で四つんばいで歩いたりして、それから立ったので、本来からいったら、はうことを覚えてから立たないとまずいんだと思っんです。

これは発達のパターンがあるんです、はうパターンと立位のパターン、背臥位から寝返ってお座りするパターン。ホルツという人の会った津の考えは、これらの並行でいく。月齢に合って普通はいくものです。中にはそれがずれるパターンもあります。歩くということだけからいけば、これを通らなくても歩いて構わない。だけど、普通はこれをみんな並行してやっていって、最後に歩くという感じなんですね。

井深 一種類じゃないですね、その人がとるのは。

前川 違います。普通は、人間は三種類の能力がある。生まれたときは寝たまま、はらばいにすれば少し頭を上げる、立たせれば足をバタバタ、寝返るころになると、手で腋下を支えると、足をついて体重を支えるようになる。お座りのパターンですと、これの最高の移動法

がいざって動くということです。

これ以外に、背ばい - - ブリッジとか尺取り虫這行といいますが、背中ではっちゃう子がいるんです。背ばいの子は、ちゃんとお座りします。

細かいことからいきますと、移動法が幾つかあるんです。大体はこれを並行してやるということです。要するに、自然のバリエーションがあるということですね。

器用さは赤ちゃん時代から

井深 私は例えばお布団の条件であるとか、寝巻きの条件であるとか、今みたいにくるみ込んでやっているじゃなしに、温度には留意するけれども、なるべく裸で動きやすいような状態に置くということから、始めていきたいという気がするんです。

先生は、うつぶせの寝かせ方については、どういうふうにお考えになっているんですか。

前川 私、外国に行って驚いたのは、外国は全部うつぶせで、日本はほとんど仰向けで寝かせている。日本の子供を向こうの子供をどこが違うかという、向こうの子は首がしっかりしているんですね、頭の後ろが出ていて。日本はどちらかという、絶壁が多い。そのかわり日本人は手先が器用なんです。

仰向けで育てると、赤ちゃんの手が自由にあきますでしょう。だから手先が器用になる。うつぶせは運動が発達する、そのかわり手先がぶきっちょになる、という説があるんですね。

だから、日本人の器用さというのは、育て方とかこういうところからも出ているのではないか。ですが、今は、未熟児は腹ばいで育てる。新生児保育は腹ばいのほうが優位みたいですけど・・・。

井深 首を上げるということ、首をしっかりするということが、初期には相当ひつ王な条件だとすると、日本はふんわりしたお布団に寝るとということが国民性になっちゃってますから難しいですね。

前川 あれはよくないですね。

井深 だから、かたい敷ぶとんで薄いものを掛けてというところから始まらなきゃいけない問題なんですけど。

前川 あと、仰向けは興味のある物が見つめられるんですね。親が来たときに、親の顔を見られますでしょう。うつぶせだと、背中の方で雷が鳴っているみたいですね。だから、ものを追うとか、探索行動は仰向けのほうがしやすいんですね。向こうみたいに、ベビーシッターでもつけて、きょうは出かけるからというときは、うつぶせにしたほうが子供は喜ぶんですけど。

井深 母親とのコミュニケーションは、絶対になきゃならないですからね。

前川 そうしますと、どっちで育てても、それは好みでいい。ただ、どっちで育てるにしろ、布団は薄いほうがいいんですね。これは絶対確かです。

井深 掛け布団もそうですね。

前川 今の日本の家ですと、そんなに寒い家はありませんからね。

井深 成人は寝返りを一晩に何十遍もするといいますけど、赤ちゃんは寝返りはないんですか、そんなに。

前川 寝返りができる月齢になるまでは寝かせたままです。ただ、驚いて首を横に曲げると、体が回ってしまう反射があるんです。ですから、はかりに載せておいた子供が落っこったというのが「よくあります。反射なんですね。驚いて、ハーっといったときにそのままぐるっと回って落っこっちゃいますから。

自分では寝返りできない、裸にして自由なときに、偶然体が回る反射があるんです、立ち直り反射です。僕らがいろんな実験をやっても、寝返らないはずの赤ちゃんがころころ寝返ります。普通はないですね。寝返るのは早い子で五ヶ月ぐらい。いっぱい着物を着せていれば寝返れないですね。

井深 一番理想的な子育ては、ウガンダの人たちがやっている、真っ裸で胸へ三角布で抱いて、朝から晩まで、寝てる間もそのまま胸に、おむつも絶対しないんです。それもいろいろ先生とご相談したいと思ってるんです。

前川 おむつをしないというのは日本の現状ではどうですかね。おしっこだらけ、うんちだらけになっちゃいますね。

井深 ウガンダでは、一週間たっても布を汚すようだったら、お母さんの資格がないといって、さげすまれるんですね。

前川 澤田啓司さん（澤田小児科医院長）が書いています、日本人は最初おむつをしてなくて、どうしてそれをするようになったか。

第一、昔は布がすごく高等なので使えないんですよ。いまは紙おむつなんてあるけど、昔はみんな、おむつをさせるほど豊かじゃないんですよ。だから裸で抱いて、適当にやらせておいたみたいなんですね。

井深 だけど、生まれてすぐからだったら、どんな温度にでも耐えられるんじゃないですか。

前川 ほんとはそうなんですけどね。

井深 そこまでいくのには……。

前川 それをするには、恐らく百年の歴史じゃだめなんじゃないですか。千年ぐらいかけまして（笑い）人間を変えていきますと、適応が出てくるんじゃないかと思う。いまの日本で生まれた赤ちゃんが、すぐそういう環境に慣れて適応するかどうかですね。少しずつ少しずつならしていけば、裸でいたってどうってことはないと思います。ただ、それを幾つからやったらいいのか、ちょっとわからないです。

井深 産まれて一週間たったらもう手おくれだと。私の想像ですよ。だから、病院で出産したんじゃその実験はやれない。

前川 赤ちゃんの膀胱におしっこがたまるでしょう、刺激を与えるとシューッと出るんです。だから、じっと抱いてるときはしないんですね。離してポンと置いたりするとスーッとする

んです。そのコツを覚えれば……。

井深 そのコツをお母さんがつかむべきだと思うんです。

前川 ただ、ずっと抱いてて膀胱にたまって、ダムみたいにあふれちゃえば、シャーッとしちゃうんですけどね。

井深 司葉子さんが男の子が生まれた時に、もと聖路加の婦長さんに世話をお願いしたんだそうですが、その方の話では、大便でおむつを汚したことは一遍もなくて育てたと言ってましたね。おしっこはわからないけど、ちょっと見てれば、大便なんてわからないほうがどうかしてるんだという話を聞かされました。

前川 大部分の母親ががっかりするんじゃないですか、そうなるよ（笑い）。やっぱり暇な人、つきっきりの人じゃないとできないんじゃないですか。

井深 だから、産まれて何ヵ月までかは暇を絶対につくらなきゃうそだと思うんですね。

前川 そりゃそうなんですけど、今、産むとすぐ働いてしまう人が多いというのが実際のところで……。

井深 お母さんをその気にもっていかなければ　そういう社会運動を起こしていかなきゃしょうがないと思うんですね。どこかへ預けて働くのが、非常にとうとい母性をないがしろにすることじゃないのか。女のかたで特にインテリの人というのは、育児なんかは自分のやっている仕事を置きかえられないという考えを持っている人がいる。私はびっくりしましたけどね。

そういう考えを持っているお母さんが非常に多いんだけど、やっとこのごろ、母乳だけは、あんまりワアワア言わなくてもそういう気持ちになってきたようですね。母乳を与えることは間違ってるみたいな考え方が、戦後ずっとありましたからね。

母性を育てる

前川 近ごろは、母乳でやりたいという人がだいぶふえてきましたね。ただ、産まれた後の指導や何かの都合で粉ミルクを飲ませちゃうと、どうしても出なくなっちゃう。

井深 産婦人科の先生とか小児科の先生に、産まれて一週間母乳が出なくても大丈夫なんだというをもっと声を大きくして言っていたらかないと、三日四日出ないと、これは大変だと、先生方のほうが怖がっちゃうんですね。

前川 すべての女性が母乳でできるかということ、厳密に言えば一〇〇%は出ないようですね。ご存知の岡山の山内先生（注・国立岡山病院長 山内逸郎先生）母乳の神様みたいな人ですが、母乳が出ないと、お母さんも一緒に入院させるんですって。それで一週間か十日ぐらいやって出るようにする。それでも出ないお母さんがたまにはいるみたいですけどね。これはよけいなことだけど、僕らがやった、母乳と粉ミルクとどこが違うか、どうして新生児に母乳がいいかという実験で、最初に気がついたのは、母乳の赤ちゃんは寝る時間が長い、深睡眠が多いんです。そして脈拍が遅い、安定している。それから、飲んでから寝

入るまでの時間が短い。そのかわり、抱いて飲ませている時間が長い。

粉ミルクですと、生後六日か七日で八十ccやりますと、早い子は四、五分で飲んじゃう。飲んだら飲み口をポンと抜かれちゃうと、暇になって目をあいてるか、ぐずっている。母乳は、その時期ですと授乳時間が二十分から四十分ぐらいかかるんです。母乳と粉ミルクでどうして違いが出るかということで研究しました。最初に母乳をやって次の哺乳まで三時間観察し、次に哺乳びんに同じ量の母乳を入れて与え三時間観察するのです。その二つで行動が一緒にならない。つまり、母乳そのものが影響を与えていたわけではないのです。ああだ、こうだといろいろ実験した結果、哺乳びんを二つ用意しまして最初の哺乳びんに哺乳量の七〇%入れる、それは最初の四、五分で飲んじゃう。あとの哺乳びんは、乳首にすごく細い穴をあけて、三〇%のミルクを十五分ぐらいかけて飲ませるようにする。そうすると、睡眠のポリグラフが母乳と一緒になるんです。

井深 母乳にせよ、ミルクにせよ、愛情のこもった時間をかけるということですね。

前川 ですからやっぱり、やるという気持ちの問題なんですね。母乳をやるという親の行動が影響するので、ただ母乳をやったからって、赤ちゃんが何もかもよくなるわけじゃないですね。

井深 すべての環境ですね、抱き方から何から。

前川 ですから、粉ミルクのときは長く抱いてるとか、話しかけるとか、目を見るとか、要するに母性的行動があれば、ミルクでも母乳と同じように赤ちゃんは安定するんです。

井深 これは重要なことだな。

前川 未熟児を育てるときに、お母さんがいないからどうしても粉ミルクを飲ませますでしょう。その後で、一人の子にはおしゃぶりを吸わせてやる、もう一人の子にはただ飲ませるだけ、おしゃぶりを与えない。そうすると、同じ量を与えても、おしゃぶりを与えたほうが体重増加がいいんです。だから赤ちゃんは、いろんな意味で口の刺激をしたほうが、情緒も安定するし体重もふえる。

さらにおもしろいのは、お母さんに聞いてみますと、必ずしも後半になるとおっぱいを吸っていない。

井深 遊んでるんですね。

前川 要するに、ちょこちょこ、ただいじってるだけ。親は吸ってる感じがなくなる。それがひとつの安定につながるんですね。

だから、今の小児科ですと、母乳は母乳で大いにやる、だけど出ないお母さんが罪悪感を感じちゃまずいわけですから、そういうお母さんには、こういう僕らの研究データをもとにして、母乳が出なくても、長く心をこめて抱いてあげればいいんですよということを教えると、安心するわけですよ。

井深 それは必要なことですね。

前川 ですから、いまの育児は非常に多様性がありまして、母子相互作用でもそうなんですね。

井深 もう一つ、体脂の問題で、このごろはあまり体脂がついて出ないという話も聞いてるんで

すけどね。

前川 それはどうかな。

井深 山内先生とした話なんだけど、体脂というのがついてれば、一週間くらいは栄養を皮膚から吸収するから、水ぐらいやっておけば大丈夫だというのを、この間のメキシコの地震が立派に証明した。十日間もってるんですね。

前川 確かにうなずけますね。脂ですから脱水しないんですよ。

井深 それをきれいに洗い取っちゃうからいろんな問題が起きてくるんだと。

前川 お風呂に入れる民族というのは限られてるんでしょう。産湯をつかわない民族があるわけです。

僕たちは、新生児の状態が悪いときは一切産湯はつかわないです。そのまま目方もはかるし。産まれた赤ちゃんを洗うというのは世界共通じゃないですよ。恐らくアフリカの原住民なんてやってないですよ。メキシコでもやってないだろうし。要するにきれいで血をふいたりなんかするだけで、少なくとも日本みたいに、石鹸つけて頭から洗うということはないです。あれは清潔好きというのかな。

井深 清めるという思想が日本の場合は非常に強いんですね。

遺伝と環境

井深 先程の赤ちゃん体操の話に戻りますが、これから赤ちゃんを産んで、やりましょうという人に、実験を始める。それくらいの気持ちでいます。こういうことがいいからどうせいというつもりは持っておりません。

前川 あとは続けることですね。

ご存知だと思うんですけど、赤ちゃんはすべて同じじゃないですよ。テンパラメント(気質)でいいますと、おもしろいのは、運動が好きな人はものおじしないで、どんどん何にでも入っていく。だけど、そういう人は科学者になれないですね。何でも受け入れて疑わないからです。ところが、恥ずかしがりやの子は疑ってかかるといいますか、「これ何かな」って見るんです。

例えばめがねをやると、パッと壊しちゃう子もいるし、しばらく見て、かけてみる子もいるし、ただ見ている子もいる。自然に任せればそれは構わないと思うんです。ところが、四歳五歳になって体育をするときに、恐らく、体育にのってくる子供となかなかうまくいかない子供がいると思うんです。ですからある時期に来たら、それなりに……。

井深 環境をこしらえてやる。

先生は、さっきおっしゃった気質というのは遺伝的なものとお考えになりますか。

前川 遺伝とおなかの中の赤ちゃんの環境ですね。

井深 お母さんが何を考えるかという……。

前川 それももちろん入りますし、お産も含むと思うんです。この二つですね。だから、生まれ

たときに踏んだりけったりの状況、例えば仮死のような状況で生まれたら気質どころじゃないですね、まず生きることが先ですから。だけど、それでも単に遺伝だけじゃないですね。というのは、同じ夫婦で子供が全然違いますから。

井深 プリミティブな問題ですけど、遺伝と環境のウエートをどうお考えになりますか。

前川 環境の方が強いと思います。

井深 どのくらい強いですか。

前川 さっきのずっとはう子なんていうのは、そのはい方を変えることはできないですね。リハビリの人が、親に「足をつかせて一日二分ずつやりなさい」とか言ったって、ちっとも変わらないですね。

井深 それは遺伝ですね。

前川 ええ。そういうのはちょっと無理だと思うんです。普通は、僕は統計とって見たんですが、半年ぐらい後、少なくとも一年過ぎると割合みんな似てくるんですけど、新生児期は必ずしも比例しないですね。でも、新生児期におとなしい子は、ある時期まではおとなしいことが多いですね。診察していても。

井深 どこからどこまでが小児科の範囲なんですか。いわゆるお医者さんとしての小児科というのは。

前川 産まれた時からですね、お産にも立ち会うし。そこから、人によっては二十歳以上も診てますね。普通は十五歳までですね。

気質がどう変わるか、環境因子がどうかというのはよくわかりません。だけど見てますと、どうも環境因子のほうが強いような気がするんですね。だから、アフリカの運動能力のすごい子供を日本に連れてきて、日本で育てたらおもしろいと思うんです。

井深 私はそれをやろうと思って、オーストラリアに、石器時代と同じ生活をしているマンジンジャララという種族がいるので、その生まれてすぐの赤ちゃんをもらってきて育てようと、里親まで決めたんですが、オーストラリアの政府に、聞き入れてもらえなくて……。時実先生にそのことを報告したら、そんなことやらなくなっちゃってわかってる。日本人に育ちますよって。わかってるよって言われても、世の中を説得するのに、そのくらいやらなきゃと思って。

前川 不思議なのは、文明水準の低い民族、原始的な民族ほど乳児期の発達が早いんですね、いわゆる首が座るとか歩くとか。

井深 僕は今、「クリティカルピリオド」(臨界期)ということですけど書いてるんですけどね。

前川 関係ありますか、それは。

井深 非常にあると思う。新しい音が入ってきたときに、その音を受けつける能力というのは満一歳までだということですね。ネコの実験で、縦線と横線の知覚がよく心理学の問題になりますけれども、あれも三週間ですか、クリティカルピリオドが。

前川 目はそうなんですね。縦線ばかりのオリに入れておくと、横線が見えなくなる。

井深 視力に限らず、すべてにクリティカルピリオドが存在すると思うんです。

前川 クリティカルピリオドは確かにあると思うんです。母子相互作用的なものから見ますと、僕は、より親のほうに強いと思うんです。例えば、子供をもらって育てますね、親がいなくて。古今東西、もらいっ子でも立派に育つ人はいますね。それは実母、実子という点からは、母子相互してないわけです。

じゃ、一体いまの母子相互というのは何か、お母さん側と赤ちゃん側と見てまして、マザリングという言葉で呼んでるんですけど、母性を育てることが親には絶対必要なものだと思うんです。結局、母性がよくなれば子供も相対的によくなります。

僕らがやった実験は、お母さんに、まだ名前ついてないから何でもいいから呼んでくれと言って、「Bちゃん」とか赤ちゃんを呼ばせるわけです。退院する時に静かな部屋で呼ぶと、そっちを向くんですね。それから、親のにおいのほうを向きましたりね。そのかわり、親じゃなくてもいいんです。僕が毎日抱いてれば、僕に向くんです。

井深 マザリングというのは、何がなんでもマザーの必要はないわけですよね。

つづく

' 86.10月

井深対談

母性を育てることこそ… (2)

ゲスト：前川 喜平

前川 喜平(まえかわ・きへい) 東京慈恵会医科大学教授。
昭和8年東京生まれ。昭和39年慈恵医大大学院修了。医学博士。
40年から2年間、アメリカのウィスコンシン大学(小児科)・コロンビア大学(神経科)に留学。46年国立大蔵病院小児科医長となり、55年4月より現職。

臨界期の信号

前川 この間私がやった研究に、赤ちゃんの味覚があるんです。赤ちゃんの味覚をテストしますと、大人の半分ぐらいの濃度で食塩とか苦いものを識別するんです。成人の実験で、成人は食塩が0.5%でわかるんです。ところが赤ちゃんがわかるのが0.25%。それから、酒石酸は苦さですが、大人が0.2%、赤ちゃんは0.1%なんです。脳障害児でもものすごい反応を起こす。しかし記録にとろうと思って毎週やっていると、それがだんだん弱くなっていきます。

井深 なれちゃうんですか。

前川 原始反射と同じなんです。新生児期は強くて、だんだん消えていく。本当に敏感だった子が、3カ月から5カ月ぐらいの間に同じ物をばか飲みする時期があるんです。そのころがちょうど離乳食の時期でミルク以外のものを始める時期なんです。それはいろんな文献に出ています。つまり、ものを味わう、人間の本当の味覚は、乳児期の前半じゃなくて離乳食を始めるころからで始めるのです。

だからうまくでき過ぎてるんです。最初からは悪い物は食べないし。そういう組み込まれた感知力を赤ちゃんは持っているんだと思います。

井深 そうでしょうね。

前川 新生児期に見られるいろいろな反応は、母親に向けて出す1つの信号なんです。赤ちゃんに自分の養育者がわかるのは、いくら早くても5カ月から6カ月。わかる程度にもよりますが、ですからどうしても親が育てられない時は、そのころにもらい受けて愛情を持って育てれば、子供は実の親がいなくてもいいわけです。それから後は、年がたつにつれて、親が違っちゃったら子供のいろんなことが、むちゃくちゃになっちゃうんですね。

井深 ウガンダでは、民族の決まりとして3歳か4歳になったら里子にやらなきゃならなくなるんです。その時に、母親から引き離されるので、みんなおかしくなるんです。だから、独立させるのも必要だけど、その経路を初めから考えておかなきゃうそだと思うんですね。

また今アメリカで、トイレット・トレーニングをするために、母子離間がものすごく起きてるんですね。満1歳ぐらいになると、急にお母さんの態度が今までと変わって厳しくやるので、そのための母子離間が起こる。

前川 神経の成熟も悪いのに、どうして1歳でおむつをとらなきゃいけないかという疑問がわくんですけどね。

井深 もっと早くとってしまえば何でもないことで、いまの教育というのは全部手おくれ、クリティカルピリオドを過ぎたことばかりやっているんだと私は主

張りたいんです。

前川 社会的にそういう習慣になっていけば、恐らくそれも可能だと思うんですが。

井深 だから、そういう革命を起こさなきゃだめだと。

前川 そういうふうにした場合にどういうメリット、デメリットがあるかということも問題ですが、実験的にはおもしろいですね。

井深 今、紙おむつの性能がすごくよくなってるから不快感がない。私は、これは非常に怖いと思うんですね。2歳までみんなしているということはどう思われますか。

前川 昔は、おむつをいつまでもしてるとだらしのない子になると言いましたね。わからないな、そこのところはどうなるかは。

井深 やっぱり人間のセンシティブティに関係してくるんじゃないでしょうかね。

前川 そりゃそうでしょうね。

井深 尿意をもよおしたという表現をしたら、早速それをいい気持ちにしてもらえるんだというトレーニングが必要だと思うんです。

前川 情緒が安定すると思いますね。したいときに、親が来てやってくれる。子供というのは、親がそばにいた方が動きまわるんですね。母親のひざにいて、そっちに用を足しに行って、また帰ってきて抱かれる。だんだん行動範囲が広がっていくんです。

井深 サルなんかですと、利口な母親ほど早くほうり出す。だけど、その行動半径を、何カ月たったらこのくらい、何カ月たったらこのくらいと、しっかりチェックしていて、何か起きたときにパッと飛んでいけるような距離をキープしてるんですね。愚かな母親ほどいつまでも抱き締めていて、そこからはボスなんていうのは絶対出てこないです。

前川 ですから、自然に体験させる。子供たちは体験じゃないと学習しませんから。

井深 気質と性格とは違うんだと思うんですが。

前川 学問的定義では、生まれて間もなく持っているものを気質といいます。性格はそれに環境因子の影響が加わります。ですから、例えば私の場合、私はもう気質じゃない、性格です。気質というのは乳児からせいぜい3歳ぐらいまで。ですから小学生の気質調査というのはないです。大体は性格テストになってしまいますから。だから性格は後のものとしてよろしいんじゃないですか。

井深 また私の憶測でものを言いますが、性格も相当早く環境の影響を受けるだろうと。お母さんの態度なんていうのはもちろん性格づくりに影響してるけど、1年たったら決まっちゃって手おくれだと私は思うんですがね。

前川 そうかもしれないですね。

井深 私、パターンという言葉を使っているんですけど、ほとんどの問題は、パタ

ーンの繰り返し。

パターン認識といいますと、このごろコンピューター的にとられるので、何かほかの言葉がないかしらと思うんですけどね。

ところで先生に受け入れられるかどうか知りませんが、知的なものが入ってくると右脳のセンシティブティは育たなくなってしまうだろう。だから、言葉は早く定着させるべきじゃないというのが私の考えで、その前に、何かしらセンシティブティというものを養うような環境を与えていかなきゃいけないだろうと。それには6歳では絶対に手遅れです。

前川 好奇心を持って、探索するようなものをたくさん置くわけですね。しかし少なくとも乳幼児には、知というのはちょっと言葉がきつ過ぎるんですね。

井深 もっとも心理学者さんみたいに、赤ちゃんは3カ月になったらどうするんだ、半年になったらどうするんだという、あのきめつけも、私は非常にまずいと思うんです。

前川 クリティカルピリオドというのは、スポーツでも何でも、ものによって違うんじゃないですか。

井深 全部違うでしょうね。

結婚してからでは遅すぎる

前川 教育の問題で、1番大切なのは乳児から幼児になる時。そしてさらに、学童とか上のほうのシステムまでを変えていかないと。

井深 だから、母親に、ゼロ歳からが重要であることにまず関心を持ってもらうことから始めなきゃしょうがないと思うんですね。

前川 ぜひ母親に教えたいのは、次にどういうステップが来るか、それにどう対処したらいいかということなんです。子供の発育の方が早くて、何か問題があった時に親がついていられないんですね。

井深 問題はそれだと思うんですね。先のことまで考えられない。

前川 考えない。だって、生まれた時はミルクやって大きくするだけでしょ。歩き始めれば、けがだとか言葉だとか、おむつで、わさわさ過ごしてしまう。問題が起きてきて初めてそのことに当惑する。人生観というか、人間を見つめるための、ちゃんとした知識がないんですね。そこのところをいつ教えたらいいかと思うんですね。

井深 それはだいが私どもの協会ではやってるんですけどね。

前川 私は、前に受胎前小児科学ということを提言したことがあるんです。妊娠したお母さんを相手にしたってだめなんです、すでに遅過ぎるんです。第一、結婚したら女性は遅いんですね。

- 井深** こういうつもりで結婚しなきゃいかんという、しっかりした考え方があった、なお、その中で1番大きい問題が育児だろうと思うのでね。
- 前川** そのためにはいい親をつくる。いい親をつくるためには小児科からやらなくちゃだめなんです。いい小児科でいい子供を育てて、それが子供を産んでいい母親になっていく。いいサイクルを作る。やっぱり百年はかかっちゃうんですね。
- 井深** 私は、生きてるうちに結果を見ようなんていう、気短なことはひとつも考えておりません。
- 前川** 私は、中学生とか高校生とか、これから親になる人にそういうことの講義をしたいんです。現実的に私ら忙しくてそんなことやってる暇ないけど、そういうことをしっかりしておけば、あとは家庭教育ですよ。そしていいお母さんができれば、子供は必然的によくなりますね、父親教育も含めて。
- 井深** 精神的なことの前に基本的なものを備えさせる。そのためには体育が1番最初であって、それから愛情であるとか信仰であるとか、センシティブリティを養えるようなことをやって、それからぼつぼつ言葉を始めて、知的なものに入って行く。
- 前川** お茶の水の平井先生とかは、情緒が育たないと絶対有用な知識はのらないと言ってるんですね。
- 井深** それはほんとでしょうね。
- 前川** ですから、情緒を育てて、心を安定させて知識を与えると、社会に役立つ知識になるというんですね。
- 井深** 私は、情緒よりももうちょっとシビアに、センシティブリティという言葉を使いたいんです。センシティブリティは、ひょっとしたら、ESPとか超能力的なものまで持ってるんじゃないかしらというのが、私の得意の想像なんですけどね。
- 前川** インプリンティングは、おなかの中からあると思うんです。ローレンツ博士の、アヒルが人を親と違ってついていった、というのがありますが、あれはアヒルでそうなので。
- 井深** ローレンツのは人工孵化の鳥なんです。母親が抱いて孵化した子供というのは、母親に必ずくっついていくんです。
コミュニケーションがあるんですよ、抱いてる最中に。卵と卵の間のコミュニケーションもあるし、親とはもちろんある。
- 前川** だから、胎教だってある程度はあるんですよ。
- 井深** 非常にあるんですよ。胎教というよりも学習ですね。
- 前川** 学習というのは時機が非常に必要なんです。しかし、何をその時期に与えるかということはだれもわかってないわけです。

井深 そうなんです。それをやらずに、ただ教育ということをやっているのは、とんでもない話なんだ。

前川 1番いい時に1番いいものを与えて人間を育てたら、どういうふうになるんですかね。ものすごい超人になっちゃうんじゃないかな。
そういう人間を育てていったらおもしろいですね。

井深 いま学問的に1番知られてないのは、胎児、新生児の能力ですね。これはフロイトが悪いので、心というのは赤ん坊にないという扱いをしている。

前川 私、神経の方をやってまして、だんだんわからなくなってくるんです。そうすると、対象がだんだんに幼児になり、乳児になり、新生児になっていくんですね。だから新生児というのはすごく興味があるんです、人間の出発点として。いろんな能力を持っていますし。ただ、能力とっていいのかわからないけど、何しろそこところが謎なんです。新生児というのは単純に割り切れないたくさんのものを備えている。ところで、センシティブティというのは直感力のことですか。

井深 まあそう考えていいです。だから、これを見て、おもしろいなと思うのもパターンですよ。

前川 それから、パッと見てひらめくとか。確かに創造性というのはひらめきですよ。理論的でいかない…。

井深 いまの左脳からの考え方では、絶対に創造力は出てこないでしょうね。

前川 ノーベル賞の福井先生がそれを非常に主張しておられますね、科学的直感力。もちろんベーシックにやらなきゃだめだけど。

井深 漢字というのは、日本人にとって非常にベーシックな事柄なので、漢字を3歳から教え始めるのと、4歳から教え始めるのと、5歳から教え始めるのを、石井勲先生という人がずっとやっておられますね。5歳から始めるなら、いまの小学校の6歳と同じなんです。ところが、3歳から始めますと、小学校2、3年になっての成績が歴然と違うんですね。
そこで大切なことは、0歳から3歳くらいまでのパターンの教育の時代には、意味とかそういうことを絶対追求しちゃいけないんです、ジャストパターンでもってね。

前川 そうなんです。昔、詩や何かを暗唱したでしょう、いい気持ちになって。それでいいんですよ。

井深 日本の詩とか漢詩だけじゃなしに、外国の詩でも、詩というのは非常に重要なんです。初めは棒暗記でいいんです。

前川 いまはそういう教育がすごく少ないんじゃないですか。棒暗記じゃだめなんですよ、解釈はどうだとか。

日進月歩の小児科学

前川 私たち、山内先生に、どうしても母乳の出ない母親を救うことを、一言書いていただきたいと思いますね。そういうお母さんがみじめな思いをしないように。母乳はいいけど、出なかったらどうするということが一言ほしいんです。

井深 いままでは、出ないときめつけちゃうのが早過ぎるんじゃないですかね。

前川 おっしゃるとおりですね。それから、お産の後母親を休ませるために、夜は粉ミルクをやって、昼間しか母乳をやらない人がいるんですね。1週間から10日、出産直後はほんとにうまく出ないでしょう、母親のほうが疲れちゃうんですね。その我慢ができない。それをやらせなくちゃいけないんです。赤ちゃんは1週間そのままでもまず死なないですから。

何が何でも母乳でやろうとする意思が必要みたいです。そうすると、普通に出るみたいですね。

とにかくお母さんたち自身が、子育てをしていく覚悟をなかなか持てくれないというか、ああ言われるとフワッとになって、こう言われるとフワッとになって、何が何だかわからない。あっちのお母さんはこう言ってる、でも先生はこう言ってるし、みたいな、やる気がないのではないんですけれども。わからないんです、いろんなことを言われてるから。

井深 あまりにも情報がたくさんあり過ぎるんですね。自分で自分の判断に自信が持てないというか。

前川 いまの育児相談は、たくさんの情報の中から、その子に合った情報を選んで与えるんですね。昔は平均的なことを言えばよかった。6カ月ですか、じゃ離乳食を1回やりなさい、どういうものをやりますか、15%のつぶし粥をやりなさい。3、4カ月、じゃ果汁をやりなさい。

ところが、6カ月でまだ果汁をやってない赤ちゃんがいた時に、どうして果汁をやってないのかを聞いて、その妥当性を認めて、親に自信を持たせるものがいまの育児相談ですね。しかしいまの小児科医で、そういうことができる人が意外と少ないんです。理屈だけならみんな言えるんです、保健婦さんでも。

井深 学問の世界、専門家のサークルというものが、新生児の能力に全然タッチしなかった。これはヨーロッパが悪いわけですね。日本の仏教なんていうのは、受胎1カ月では何、2カ月では何、3カ月は何と、ちゃんと分類してお経の中に入ってるらしいですね。ところが西洋の考え方は、生まれてからでない人間じゃないんですね。だからゼロ歳から始まるわけです。昔、日本の場合には数え年でしたから、生まれた時は1歳なんです。いまは、そこら辺からの

間違いを相当やらかしている、と言ってもいいと思う。

前川 日本の小児科医は、あまりに小児科学の進歩が早過ぎて、心の方がついていかれないんですね。僕が25年前に小児科医になりました時は、栄養障害とか感染症で赤ちゃんがばたばた死んだんです。それから5年たったら、感染症は減りまして、留学して帰ってきたら、ほとんどなくなっちゃった。

ですから、僕らが医者になりたての時に学んだ小児科学はいま通用しないです。出生前の問題とか、新生児の問題とか、母子相互とか、もっともっと複雑な多様性のあることが出てますね。

井深 これから、お産に対して大革命が起きると思うんです。実はこの前、1万6千人の赤ちゃんをとりあげた81歳の大森のお産婆さんと話して、頭を殴られたような気がしましてね。1番悪いのは、局部にメスを入れることだそうです。あんなこと絶対必要ないんだと。ということは、お産に時間をかけることはお産婆さんにとっては、当たり前なことなんですね。

生まれるということの主導権は赤ちゃんが持っているんですね。自分のコンディションをすっかり整えて、ホルモンをワッと出して、それで子宮の収縮が始まるんだけど、それをいまは人為的に、時間のコントロールからやってしまう。

前川 計画分娩でやるんですね。昼間産ませちゃうとか、土曜日曜にかからないように、今日…とか。

井深 自然出産で長いのは、58時間かかったこともあるそうです。60年間、1回も切らないで無事故ですって。1万6千人。

前川 それは立派ですね。

井深 当たりの性交ができないような膣の小さい人の赤ちゃんもとりあげたそうですけど、絶対に伸びるそうですね。時機さえちゃんと待っていれば。

前川 本来、伸びるようになってるんですね。年齢にもよりますけど。あれも自然の不思議ですね。病院だったら帝王切開ですね。いまでも東京にそういう方がいらっしゃるんですね。

井深 お産婆さんがなりたない。みんな病院へ行っちゃうらしいですね。

いまは開業しているお産婆さんが大変少ないので、助産婦学校を卒業した人たちが、自分で開業しようと思っても、モデルがないからできない。勇気がわからない。

前川 まず不可能でしょうね。結局、みんなが病院へ行ってしまうということなんですね。何かあった時に訴えられることがあるし…。

井深 その助産婦さんも、手に負えなくて病院へ送った例はありますと言っていましたね。

前川 それは偉いんですね。うまく産めるか産めないかの判断は、大変難しいのです。

井深 赤ちゃんというのは、生まれた次の日から、人を見て笑うというのが自然出産の常識なんだそうですが、それを欧米の医学では、乳児微笑シンドロームという病気にしてるんですね。西洋医学のやり方ではお産の時の衝撃による後遺症を、大なり小なりみんな受けている。

人間と同じ医学的手法でサルにお産させたら、全然使い物にならないそうですね。母親は子供を抱こうとしないし、子供はおっぱいを吸おうとしない。

前川 しかし、いまの日本の女性に自然出産が耐えられるかしら。

井深 だから、意識革命を起こさなきゃならないと思うんです。

私は、今日、大変いい相棒を見つけたと思って（笑い）。

いい子供からいい大人へ

前川 小児科というのは、いい子供を育てて大人にするということが最終的な目的なんです。私が興味を持ってるのは、決して病気じゃないです。病気は、病気の子が来ちゃうからやるので。病気がなくなって、心身ともに健康な子供が、いい大人になるというのが小児科の理想なんですよ。

井深 自殺が始まれば自殺をどうしたらいいかってことばかり、非行が始まれば非行ばかり、あっちこっち膏薬張りばかりやってて、そんなことで解決つくわけないんですよ。

前川 社会の根本が狂ってるんですね。それも僕も同感だな。

私たち小児科でやりたいのは、社会がいい子供を育てるために手をつなぐような、子供を大切にできる社会に、日本をしたいですね。

井深 私に言わせれば、ゼロ歳から初めさえすれば、非常に簡単に解決する問題がいっぱいあるのを、病気と同じで、手おくれになってからばかり…。予防育児をせずに。

前川 その意味で、母親の意識を変えていかなきゃいけない。これしかないと思うんです。

井深 ほんとにそれをやらなきゃだめ。

前川 そうすると女子大生から始めなくちゃだめですね。それがいかに大切かわからせる。女子大では遅過ぎるか、子供ができちゃう年だ。

井深 私の経験では、女子高校の卒業式なんかに行って話をしても、ぴんとこないですけど、妊娠したお母さんというのは、ちゃんとした人は、ほんとに責任を感じますから、母子手帳を渡すときに、そんな長々しく講義なんかしなくてもいい。ポイントだけを授ければいいと思うんだけど、そのポイントがないんですね、いま。

前川 もう 1 つは、母親の教養がある程度あるので、保健婦さんとか、ちょっと話

しきれない面があるんですね。

例えば、赤ちゃんの体重が減っていて、やたら心配するお母さんでも、お母さんそんなこと言ったって、まだ子供を育てるの1人目じゃない、僕は小児科になって10万人診てるって言えば、たいがい黙っちゃいますからね(笑い)。そういう迫力がないわけです。保健婦さんだったら、教科書に書いてあるとおりに、妊産婦には栄養とか清潔とか食事とか、そんなことを教えるでしょう。そんなものじゃ、ぴんとこないですね。質問したって、紋切り型しか返ってこない点がある。

井深 フィジカルに育てることばかりの習慣がついちゃった。昔とか戦後は、食うに困ったから、どうやって生かすかという、生命を守らなければならないということが1番大きな問題だったんだけど、そのままを受け継いじゃってるんですね、いまになっても。

前川 さっきの気質の話にしても親に、この赤ちゃんは育てにくい難しい子だから、これこれ、こういうことに気をつけてくださいと、具体的に言うんです。ただ、お母さんのやり方が悪いんですよというのでは、親にとっては随分違うわけです。ところが、今度はその具体的なことの区別がつかないんですね。泣いてばかりいる、ミルクが足りないんでしょうか、とかね。

僕は、免疫の抗体と抗原の関係と一緒にだと思えます。親と子供は組み合わせなんです。だから、10人子供がいれば、親とうまくいく子供といかない子供といます。そここのところを親がそれになじむように話すと親は安心するわけですね。親にそのとき罪悪感を持たせちゃいけない。赤ちゃんにもそういう体質があってお母さんがこうだから、こういうふうに気をつけなさいとか、安心しなさいとかね。

だって、親が育てる以外子供って育てない。いくら理屈を言ったって小児科医が育てるわけじゃないし、保健婦が育てるわけでもない。だから、親が自信を喪失したら、子供は絶対だめなんですね。親の欠点を突くよりも、持っているところでいい所をほめて、いい親にしたほうが得なんですよ。ところが、いまの育児はそうじゃなくて、マスト(しなくちゃいけない)ばかりで、メイ(したらよい)という育児がないんです。それは、いまの集団健診とかそういうことが悪いんですね。

これからは個性に合った育児指導をいかにするかということになるんじゃないかな。そのために、小児科の教育も変えなくちゃだめですね。

母性の大切さを教える

前川 僕がよく親に言うのは、育児書を買う場合でも、本屋に行って育児書を開い

てみて、自分がしていることに合ってる育児書を買いなさいと。自分がしたことを認めてくれる育児書を買えば、それがバイブルになる。

井深 そうですよ、信用しなきゃ…。

前川 だから、育児書の相性を探しなさいと言うんですね。そういうことから言えば、いまは楽しいんですよ、たくさん本があるから。いろんなチョイスがある。昔は、結婚のお祝いに贈ったのがスポック博士か松田道雄さんかどっかあったでしょう（笑い）。その意味で、ほんとは変わらなくちゃいけないんですね。子供の本質は変わらなくても、育児の方法というのは、時代とともに多少変わっていくんじゃないかな。

井深 胎児の性別を、早くから知らせたほうがいいというのは反対が多いですね。先生は？

前川 私は反対です。

わかるのはいいけど、4人、女がいて、5人目に女ができて、産めばいいと思うんです。だけど、女の子はもういいと、産まないために流産させちゃってまた、というのは、僕はやっぱり神に反するような気がするんです、自然じゃないような。

だって、どこかに5人、男がいる人がいるはずなんですもの。そういう意味では性別判定というのは僕は好きじゃない。どっちかって楽しんで、女だったら花子にしようとか、男だったら正夫でいいやなんていうんだったら、罪がないと思うんですね。

50%当たるんだもの、確率としてはいいですよ。私は、わかり過ぎる科学というのは嫌いなんです。

子供にしても女性にしても、神秘があったほうが人間らしいと思うんですね。すべてが解明されちゃったらつまらない。

井深 性教育なんかもそれですね。早くからやっちゃえば、妙な不潔感なんか持たなくなるんだらうけども。神秘性というか、隠されたものの尊さというか、あんまりあからなさまなのも困りますがね。

前川 しかし、いくら正確に教えても、5歳の子供に教えるのと中学生に教えるのと受け取り方が違うと思うんです。小学生がいくら正確に教わっても、それはそれで、その域を出ないと思うんです。だから、年齢によってどうするかというのが難しいところですね。

性の問題は、親が黙っていても知るんですね。死の問題と性教育は似ている。親が隠しているけど子供は知ってしまうとか、知識が不正確だとか、だれでもあまり教えたがらないとか、非常に似てるんですね。だから両方を対比して説明する学者もいるんです。

間違った知識も困るけど、あんまり教えすぎるといのもね。いずれにし

ても、コウノトリとキャベツ畑じゃもうだめですけど…（笑い）

近頃、中学生や小学校高学年の妊娠が問題になっていますが、その辺の難しさでしょうね。機能としては女性になり、男性になってしまっている。しかし赤ちゃんを産むということが、どういうことなのかわからないままに、そのものずばりですからね。母性の大切さを教える方が先、まずそのための性教育でしょう。

井深 そうですね。長時間、本当にありがとうございました。

おわり